経済論叢（京都大学）第178巻第5・6号，2006年11・12月

第1次大戦前におけるアルゼンチンとヨーロッパ「世界経済」

——貿易構造分析を中心に——

渡　邉　英　俊

はじめに

ウォーラーステインは，広義の16世紀における「ヨーロッパ」の資本主義世界経済への転形を論じるにあたり，「ヨーロッパ」にラテンアメリカを含めている[1]。彼の世界システム論においては，「ヨーロッパ」には南北アメリカが含まれるのである[2]。また，S. B. ソウルは，第1次大戦前の多角的決済網について解明するにあたって，アルゼンチンについてかなりの分量をあてて分析を行った。そしてその結果，1913年にはカナダや西インド諸島よりも，イギリスとアルゼンチンは経済的に密接に結びついていたと結論している[3]。ところが，彼の周知の多角的決済モデルにアルゼンチンが明示されていないためか，ヨーロッパ「世界経済」におけるアルゼンチンの経済的位置についてのさらなる検討は，わが国ではほとんど行われていない。

そもそもわが国の西洋経済史はもっぱらヨーロッパと北米を対象としており，

1) Wallerstein, Immanuel, *The Capitalist World- Economy*, Maison des Sciences de l'Homme and Cambridge University Press, 1979.（藤瀬浩司・麻沼賢彦・金井雄一訳『資本主義世界経済 I』名古屋大学出版会，1987年，193ページ）。

2) Wallerstein, Immanuel (ed.), *The World-Economy*, Fernand Braudel Center & The Research Foundation of the State University of New York.（原田太津男・市岡義章・山田鋭夫訳『ワールド・エコノミー（新装版）』藤原書店，2002年，37ページ）。

3) Saul, Samuel Berrick, *Studies in British Overseas Trade 1870-1914*, Liverpool University Press, 1960.（久保田英夫訳『イギリス海外貿易の研究』文眞堂，1980年，104-116ページおよび338ページ）。

植民地研究を除くと，ラテンアメリカなどの「周辺」を組み込んだ本格的な実証的研究は，ほとんどなされてこなかったといえる。本稿の課題は，第1次大戦前のアルゼンチンのヨーロッパ「世界経済」における位置について，貿易の側面から検討を行うことである。その際，ヨーロッパ側だけからの一方的な分析を避け，アルゼンチン側にも立脚点をおきつつ，ヨーロッパ「世界経済」の貿易構造についても新たな知見を得るよう試みたい。

分析に先立って，当時のアルゼンチンについて簡単な概観を得ておくことにしよう。19世紀初頭の独立から1862年の共和国樹立まで，アルゼンチンには「国民国家」は形成されず，アルゼンチンはヨーロッパ「世界経済」においてとりたてて重要な存在ではなかった。アルゼンチンの重要性が高まったのは，国家と外国資本により鉄道などの各種インフラストラクチュアの整備が進められた1880年代以降のことである[4]。温帯の広大な草原であるパンパには鉄道が建設され，沿岸部では港湾整備が進められた。さらに，ヨーロッパ系金融機関が設立され，貿易金融システムの整備が進むにともない，アルゼンチンの周辺化は新たな局面を迎えた[5]。

I　イギリスの食糧貿易の拡大とアルゼンチンの台頭[6]

周知のように，1870年代末以降，アメリカ大陸からの食糧輸入が本格化するにつれ，イギリス「農業不況」は深刻さの度合いを増した。また同時期のイギリスは，後発工業国との競争激化により徐々に工業国としての相対的地位を低

4)　国家と資本による鉄道建設と地域開発の具体的事例については，拙稿「19世紀後半アルゼンチンにおけるイギリス鉄道資本と沿線地開発」『歴史と経済』第185号，2004年10月を参照。

5)　ウォーラーステインの「組み込み」論によれば，周辺は「外延部であった時代」から「組み込みの時代」を経て「周辺化の時代」をむかえる。そして「周辺化（peripheralization）には当該地域のミニ構造の絶えざる変化が伴い，その変化は時には資本主義的発展の深化と呼ばれる形で（in ways that are sometimes referred to as the deepening of capitalist development）行われる。」Wallerstein, Immanuel, *The Modern World-System III: The Second Era of Great Expansion of the Capitalist World-Economy, 1730-1840s*, Academic Press, Inc., 1989, pp. 129-130.（川北稔訳『近代世界システム　1730～1840s』名古屋大学出版会，1997年，156-157ページ）。引用は原文によった。

6)　本稿では，連合王国の通称として「イギリス」を用いる。

下させる一方で，これらの後発工業国からの工業製品輸入を増加させていた。しかしながら，全体としてのイギリスの輸入は食糧と原料が圧倒的な割合を占めており，工業製品輸入は相対的には小規模なものにすぎなかった[7]。とりわけ，イギリスの一貫した貿易赤字の最大の要因となったのは，巨額の食糧輸入であった。イギリスの食糧部門の赤字額は，1880年から1910年の30年間で1.5倍となり，工業製品部門の貿易黒字では賄いきれない額の赤字を生み出しつづけた[8]。

こうした食糧輸入の増加は，輸入食糧の価格低下を背景に進行した。イギリスの輸入平均価格は，1870年を100とした場合，小麦では1890年74.1，1900年64.6，1910年79.7，大麦では1890年76.2，1900年76.9，1910年75.2，オート麦では1890年75.9，1900年64.4，1910年68.1，トウモロコシでは1890年65.7，1900年65.8，1910年80.5，さらに小麦粉では1890年81.7，1900年66.6，1910年78.6と推移した。また，食肉輸入は世紀転換期ごろから目立って増加するが，その輸入平均価格は，1890年を100とすると，牛肉で1900年の93.5から1910年の79.1へ，羊肉で1900年の82.7から1910年の87.1へと急速に低下した[9]。

輸入食糧価格の低下を背景とした食糧輸入の増加は，イギリス国内の食糧価格を大きく引き下げたが，同時に，短期的な食糧価格の変動を収めて価格安定化ももたらした[10]。イギリスの小麦価格は，歴史的な食糧危機に見舞われた1840年代後半の急激な価格変動の後も，1870年代までは年間でインペリアル・クォーターあたり20シリング前後の価格変動があった。その後は年間10シリン

7) 毛利健三『自由貿易帝国主義』東京大学出版会，1978年，315ページ。

8) 本稿では，食糧には直接人間に摂取される動植物資源のみならず，家畜飼料として間接的に摂取される植物資源も含めて考えている。したがってイギリスの食糧部門の貿易赤字は，1880年1億4611万ポンド，1910年2億1873万ポンドであった。これに対して工業製品部門の貿易黒字は，1880年1億4525万ポンド，1910年2億1336万ポンドであった。*Statistical Abstract for the United Kingdom*, 各年版から算出。

9) 同上書から算出。

10) イギリス国内の食糧卸売価格の推移については，*British and Foreign Trade and Industry: Statistical Tables and Charts relating to British and Foreign Trade and Industry (1854-1908)*, 1909, pp. 186-189 を参照。

第1表　イギリスの食糧輸入先（1890・1913年）

1890年	1	2	3	4	輸入量(Cwts.)
小麦・小麦粉	アメリカ合衆国 (41.2%)	ロシア (23.9%)	インド (11.1%)	ルーマニア (5.7%)	82,381,591
トウモロコシ	アメリカ合衆国 (53.5%)	ルーマニア (19.6%)	アルゼンチン (15.8%)	カナダ (5.1%)	43,437,834
オート麦	ロシア (70.3%)	アメリカ合衆国 (15.8%)	スウェーデン (7.9%)	ドイツ (1.9%)	12,727,186
牛肉（鮮肉）	アメリカ合衆国 (91.3%)	オーストラレイシア (5.9%)	カナダ (1.5%)	アルゼンチン (0.5%)	1,854,593
羊肉（鮮肉）	ニュージーランド (47.5%)	アルゼンチン (26.3%)	ドイツ (7.3%)	オランダ (7.0%)	1,656,419

1913年	1	2	3	4	輸入量(Cwts.)
小麦・小麦粉	アメリカ合衆国 (34.1%)	カナダ (22.0%)	インド (15.9%)	アルゼンチン (12.7%)	117,856,255
トウモロコシ	アルゼンチン (79.0%)	アメリカ合衆国 (14.0%)	ロシア (3.4%)	ルーマニア (2.0%)	49,154,953
オート麦	アルゼンチン (35.2%)	ドイツ (18.8%)	ロシア (15.3%)	カナダ (12.9%)	18,162,663
冷蔵牛肉	アルゼンチン (99.4%)	ウルグアイ (0.6%)	—	—	5,248,004
冷凍羊肉	ニュージーランド (42.3%)	オーストラリア (32.0%)	アルゼンチン (19.5%)	ウルグアイ (3.2%)	5,204,257
冷凍牛肉	アルゼンチン (49.5%)	オーストラリア (34.1%)	ウルグアイ (10.1%)	ニュージーランド (6.2%)	3,952,880

出所：*Annual Statement of the Trade of the United Kingdom with Foreign Countries and British Possessions*, 1890, 1915 から作成。

グ程度の変動となり，世紀転換期ごろには年間5シリング前後に収まるようになった[11]。しかしその半面として，イギリス国内の食糧自給率は大きく低下した。特に自給率の低下が著しかった小麦・小麦粉については，1880年の37%から1904年の14%にまで低下したのであった[12]。

11)　*Statistical Abstract for the United Kingdom* 各年版から算出。

12)　自給率は国内生産量を国内消費量で除した値。*British and Foreign Trade and Industry: Statistical Tables and Charts relating to British and Foreign Trade and Industry (1854-1908)*, p. 176 から算出。この他，（国内生産量／国内生産量＋輸入量）でみた場合，1905年～1909年の平均値は，大麦59.8%，オート麦73.8%，牛肉52.6%，羊肉51.5%であった。Ministry of Agriculture, Fisheries and Food, *A Century of Agricultural Statistics: Great Britain 1866-1966*, ↗

このように第1次大戦前のイギリスの食糧輸入は増加をつづけたが，その輸入先は大きく変化した。1890年と1913年の穀物および食肉の輸入先を示した第1表からは，一見してアルゼンチンからの輸入が飛躍的に増加したことがわかる。1890年には，アルゼンチンからの輸入は，トウモロコシと羊肉がある程度みられるにすぎなかった。ところが1913年になると，アルゼンチンからの小麦・小麦粉の輸入は，総輸入量の12.7%に達した。さらにトウモロコシ，オート麦については，アメリカ合衆国やロシアからの輸入を上回り，アルゼンチンが最大の輸入先であった。食肉についても，冷蔵牛肉や冷凍羊肉は，もっぱらアルゼンチンから輸入される状態となった。

この結果，食糧輸入が全体として増加するまではわずかであったイギリスのアルゼンチンからの輸入は，1900年代以降には輸入全体の4～5%を占めるようになり，アルゼンチンはイギリスの輸入相手上位10カ国・地域に含まれるようになったのである[13]。

II 貿易相手国別にみたヨーロッパ「世界経済」におけるアルゼンチン

1 輸出相手国

こうしたイギリスのアルゼンチンからの輸入増加について，アルゼンチンの側からみてみることにしよう。当時のアルゼンチンの輸出統計は最終需要地を示しておらず，第1次の仕向け地が判明するだけであり，また仕向け地不定(for orders) 分もあるため実際の商品流通についての厳密な把握は困難である[14]。さしあたっては，明らかになっている仕向け地ベースのデータをもとに，利用可能な補正情報を加味して大まかな動向をつかみたい。

1880年代には，イギリスへの輸出額は輸出総額の9.1%に過ぎず，フランス，

↘Her Majesty's Stationary Office, 1968, p. 48, p. 56 を参照。

13) 1880年代にはイギリスのアルゼンチンからの輸入は，輸入全体の0.4%を占めたにすぎない。*Statistical Abstract for the United Kingdom* 各年版から算出。

14) 例えば，1913年の輸出額のうち仕向け地不定分は24.3%を占める。Ministerio de Hacienda de la República Argentina, *Extracto Estadístico de la República Argentina, correspondiente al año 1915*, Compañía Sud-Americana de Billetes de Banco, 1916, p. 124 から算出。

ベルギー，ドイツの大陸ヨーロッパへの輸出が過半を占めていた。その後，イギリスへの輸出が2割程度に増加するにつれて，大陸ヨーロッパへの輸出は漸進的に比重を低下させていった。これは，フランスとベルギーへの輸出が急速に重要性を低下させたためであった[15]。

2　輸入相手国

今度は，アルゼンチンの輸入相手国についてみてみよう。イギリスからの輸入は，1880年代34.8%，1900年代34.1%と一貫して最大であった[16]。しかし，ドイツとアメリカ合衆国からの輸入もまた，1880年代にはそれぞれ9.2%と8.6%，1900年代には14.4%と13.6%と継続的に重要性を高めていた。逆に，フランスとベルギーからの輸入は，1880年代にはそれぞれ18.9%と7.8%であったが，1900年代には9.6%と5.1%へと比重を低下させた。フランスやベルギーからの輸入は絶対額では増加していたが，1900年代以降のイギリスやドイツからの輸入の急速な伸びに比べ，両国からの輸入の伸びは緩やかだったのである。この他，1890年代以降，輸入の1割弱はイタリアから行われた[17]。

こうした輸出入動向を貿易収支からみると，第1次大戦前のアルゼンチンは，① フランス，ベルギー，ブラジルに対しては黒字，② アメリカ合衆国，イタリア，スペインに対しては赤字，③ イギリスに対しては1890年代に赤字から黒字へ転換，④ 逆にドイツに対しては，20世紀にはいって黒字から赤字へ転換，という状態であった[18]。

---

15)　*Ibid.*, pp. 4-30 から算出。

16)　イギリスの輸出先としてアルゼンチンの比重が高まるのは1900年代に入ってからであり，以後は英領インド，ドイツ，オーストラリア，アメリカ合衆国，フランスに次いで，カナダと肩を並べる存在となった。*Statistical Abstract for the United Kingdom* から算出。ただし，データの連続性をはかるため，オーストラリアにニュージーランドを含めて計算した。

17)　Ministerio de Hacienda de la República Argentina, *op. cit.*, pp. 3-30 から算出。

18)　*Ibid.*，およびブライアン・R・ミッチェル編『ヨーロッパ歴史統計1750-1993』東洋書林，2001年から算出。

第2表 アルゼンチンの貿易収支 (単位：1000金ペソ)

	貿易収支			
	1880年代	1890年代	1900年代	1910-13年
食糧	▲ 19,197	12,577	104,425	174,079
原材料	49,489	58,415	96,273	115,550
工業製品	▲ 57,388	▲ 70,874	▲ 146,925	▲ 343,940
合計	▲ 20,687	11,192	61,204	▲ 42,615

出所：輸出は Ministerio de Hacienda de la República Argentina, *Extracto Estadístico de la República Argentina, correspondiente al año 1915*, Compañía Sud-Americana de Billetes de Banco, 1916, pp. 54-73 から作成。輸入は Vicente Vázquez-Presedo, *Estatádisticas Históricas Argentinas, Primera Parte 1875-1914*, Ediciones Macchi S. A., 1971, pp. 78-80 から作成。

III アルゼンチンの輸出品目

1 部門別貿易収支と食糧輸出

第1次大戦前におけるアルゼンチンの部門別貿易収支を示した第2表をみると，1880年代には原材料部門のみが黒字であって食糧部門と工業製品部門は赤字であり，貿易収支全体では赤字という状態であった。これが1890年代になると食糧部門で黒字への転換がみられ，食糧部門と原材料部門の黒字の伸びにより，貿易収支全体も黒字を計上するようになった。

では第3表を使って，アルゼンチンの輸出品の変化について詳しくみてみよう。20世紀にはいり，羊毛の比重は急激に低下し，小麦，トウモロコシ，亜麻仁，冷凍牛肉の輸出が大幅な増大をみた。1880年代から第1次大戦までの期間に，小麦の輸出額は28.5倍，トウモロコシは17.8倍，亜麻仁は22.1倍，冷凍牛肉は1558倍に増加したのである。

まず羊毛輸出の不振であるが，これが19世紀末にフランスとベルギーへの輸出が重要性を失った理由であった。1880年代には羊毛はアルゼンチン最大の輸出品であり，輸出総額の50％弱を占めたが，その主たる輸出先はフランスとベルギーであった。1880年には，羊毛輸出の39％がベルギー向けであり，37％が

フランス向けであった[19]。そして，19世紀後半から20世紀初頭の欧米工業国における羊毛消費量は，第1位フランス，第2位イギリス，第3位アメリカ合衆国，第4位ドイツの順で多かった[20]。ベルギー自体の羊毛消費量は少なく，ベルギーはフランスやドイツへの中継地として機能していた[21]。また，イギリスはニュージーランドなどの植民地から羊毛を輸入しており，アルゼンチン産羊毛をあまり輸入していなかった。つまり，アルゼンチンは最大の羊毛消費国であるフランスへ集中的な輸出を行っていたのである。しかし，1900年ごろからフランスの羊毛消費量の伸びに翳りがみられるようになり，消費量は1870年代後半以後の一貫した増加から一転して減少をみた。羊毛消費量の減少は，イギリス，ドイツ，合衆国のいずれの国においてもみられ，欧米の毛織物産業が拡大から停滞局面に入ったと考えられる。こうしたなかで，アルゼンチンの羊毛輸出はさほどの伸びをみせず，フランスとベルギーへの輸出はその相対的重要性を低下させていった。

次に，急速な成長を遂げた食糧輸出の分析に移ろう。第4表から1905年の輸出についてみると，小麦の最大の輸出先はイギリスであったことがわかる。この他にヨーロッパでは，ベルギーやドイツへの輸出が大きい。しかし小麦の輸出先は，ヨーロッパの工業国に限定されていたわけではない。ブラジルへの輸出額は，小麦と小麦粉を合わせるとイギリスへの輸出額を上回っており，注目に値する事実といえる。前述のとおり，分析の資料であるアルゼンチンの貿易統計は第1次の仕向け地のみを示しており，ブラジルから再輸出が行われていてもそれを把握できないが，ブラジルの輸出の内訳は小麦や小麦粉の再輸出が大規模に行われていた事実を示していない[22]。したがって，アルゼンチンから

19)　Sabato, Hilda, *Agrarian Capitalism and the World Market: Buenos Aires in the Pastoral Age, 1840-1890*, University of New Mexico Press, 1990, pp. 196-197 を参照。1890年においても65％がフランスとベルギー向けであった。

20)　*British and Foreign Trade and Industry*, pp. 164-165 を参照。

21)　ベルギーの羊毛貿易の中継地としての機能は19世紀末には低下し，フランスやドイツへ直接輸出が行われるようになる。Sabato, *op. cit.* を参照。

22)　ブライアン・R・ミッチェル編『南北アメリカ歴史統計1750-1993』東洋書林，2001年，443，445，524，528ページを参照。

第3表 アルゼンチンの

	輸出額（金ペソ）			
	1880年代	1890年代	1900年代	1910-13年代
小麦	3,090,469	19,506,377	67,197,789	88,335,911
トウモロコシ	3,988,716	8,069,990	36,082,201	71,056,997
未洗浄の羊毛	34,961,158	38,872,458	50,638,455	53,190,102
亜麻仁	1,830,447	4,394,130	27,567,704	40,577,038
冷凍牛肉	19,137	126,712	11,476,611	29,816,957
塩蔵牛皮	3,582,646	4,572,614	7,507,970	21,495,901
乾燥牛皮	7,147,153	6,880,721	9,376,620	14,957,524
溶解獣脂	2,183,010	2,672,219	4,889,903	10,641,238
汚れた毛皮	6,069,912	5,768,390	8,267,341	7,069,896
牛	1,845,484	5,225,497	3,066,087	7,062,028
冷凍羊肉	826,277	1,957,130	5,817,024	5,542,399
干し肉	3,448,928	3,432,438	1,785,143	1,193,370
その他	3,588,375	11,797,281	26,502,286	53,266,561
輸出総額	72,581,711	113,275,956	260,175,134	404,205,919

	輸入額（1000金ペソ）			
	1880年代	1890年代	1900年代	1910-13年
建設資材	7,840	11,668	32,835	138,218
繊維製品	22,053	30,957	42,764	72,001
燃料	4,886	6,913	15,781	40,088
食料品	16,323	11,915	17,842	34,738
耐久消費財	2,672	4,457	14,571	34,125
鉄道資材	8,338	6,754	9,273	24,317
鉄鋼	2,425	4,787	12,491	20,597
工業資材	4,447	3,240	13,392	20,027
飲料	10,399	7,830	9,360	14,006
その他	14,722	13,564	30,662	48,703
輸入総額	93,269	102,084	198,971	446,821

注：本表では冷蔵牛肉についての数値が示されていないが，これは元データで冷凍と冷蔵との区
　には冷蔵牛肉も含まれると考えられたい。
出所：第2表と同じ。

主要商品別貿易額

構成比				指数（1880年代＝100）		
1880年代	1890年代	1900年代	1910-13年代	1890年代	1900年代	1910-13年代
4.3%	17.2%	25.8%	21.9%	631.2	2,174.4	2,858.3
5.5%	7.1%	13.9%	17.6%	202.3	904.6	1,781.5
48.2%	34.3%	19.5%	13.2%	111.2	144.8	152.1
2.5%	3.9%	10.6%	10.0%	240.1	1,506.1	2,216.8
0.0%	0.1%	4.4%	7.4%	662.1	59,970.8	155,807.9
4.9%	4.0%	2.9%	5.3%	127.6	209.6	600.0
9.8%	6.1%	3.6%	3.7%	96.3	131.2	209.3
3.0%	2.4%	1.9%	2.6%	122.4	224.0	487.5
8.4%	5.1%	3.2%	1.7%	95.0	136.2	116.5
2.5%	4.6%	1.2%	1.7%	283.2	166.1	382.7
1.1%	1.7%	2.2%	1.4%	236.9	704.0	670.8
4.8%	3.0%	0.7%	0.3%	99.5	51.8	34.6
4.9%	10.4%	10.2%	13.2%	328.8	738.6	1,484.4
100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	156.1	358.5	556.9

構成比				指数（1880年代＝100）		
1880年代	1890年代	1900年代	1910-13年代	1890年代	1900年代	1910-13年代
8.4%	11.4%	16.5%	30.9%	148.8	418.8	1,763.1
23.6%	30.3%	21.5%	16.1%	140.4	193.9	326.5
5.2%	6.8%	7.9%	9.0%	141.5	323.0	820.5
17.5%	11.7%	9.0%	7.8%	73.0	109.3	212.8
2.9%	4.4%	7.3%	7.6%	166.8	545.4	1,277.2
8.9%	6.6%	4.7%	5.4%	81.0	111.2	291.7
2.6%	4.7%	6.3%	4.6%	197.4	515.1	849.4
4.8%	3.2%	6.7%	4.5%	72.8	301.1	450.3
11.1%	7.7%	4.7%	3.1%	75.3	90.0	134.7
15.8%	13.3%	15.4%	10.9%	92.1	208.3	330.8
100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	109.5	213.3	479.1

別が厳密ではなく，ほとんどが冷凍の項に分類されているためである。したがって，冷凍牛肉

第4表　1905年のアルゼンチンの主要貿易相手国と貿易品目

貿易相手国		輸出品（金ペソ）					輸出総額
		1	2	3	4	5	
欧州・北米諸国	イギリス	冷凍牛肉 (12,770,971)	小麦 (6,976,976)	冷凍羊肉 (5,813,868)	未洗浄羊毛 (3,883,181)	亜麻仁 (3,382,498)	44,826,670
	フランス	未洗浄羊毛 (24,820,388)	羊皮 (5,414,876)	トウモロコシ (2,581,991)	亜麻仁 (1,617,706)	小麦 (992,400)	37,594,281
	ドイツ	未洗浄羊毛 (16,118,656)	トウモロコシ (3,638,399)	小麦 (3,576,028)	塩漬け牛皮 (3,384,936)	亜麻仁 (3,076,897)	37,058,221
	ベルギー	未洗浄羊毛 (8,001,656)	小麦 (4,839,947)	亜麻仁 (2,150,249)	トウモロコシ (2,069,712)	塩漬け牛皮 (1,511,166)	20,780,850
	アメリカ合衆国	未洗浄羊毛 (5,711,448)	乾燥牛皮 (5,357,374)	ケブラチョ・エキス (1,232,172)	羊皮 (716,388)	山羊皮 (693,733)	15,717,458
	イタリア	トウモロコシ (2,012,977)	乾燥牛皮 (1,226,735)	小麦 (823,052)	獣脂 (726,793)	未洗浄羊毛 (618,022)	6,468,941
	スペイン	小麦 (921,328)	トウモロコシ (470,379)	獣脂 (456,515)	乾燥牛皮 (318,985)	未洗浄羊毛 (71,329)	2,334,802
近隣諸国	ブラジル	小麦 (5,514,016)	小麦粉 (3,879,339)	干し肉 (1,722,316)	牛 (1,001,800)	干草 (378,050)	13,039,395
	ウルグアイ	牛 (2,734,313)	肉粉 (598,698)	干し肉 (578,783)	肉エキス (396,168)	塩漬け牛皮 (315,418)	6,705,016
	チリ	牛 (1,129,810)	ラバ (211,710)	銅 (68,026)	馬 (32,340)	小麦 (11,878)	1,510,831
	ボリビア	ロバ (169,120)	ラバ (142,450)	牛 (142,170)	羊 (24,132)	馬 (16,370)	539,574
	パラグアイ	小麦 (92,831)	馬 (87,420)	牛 (66,150)	小麦粉 (32,470)	ラバ (17,610)	330,238

貿易相手国		輸入品（金ペソ） 1	2	3	4	5	輸入総額
欧州・北米諸国	イギリス	石炭 (10,384,430)	亜鉛メッキ鉄 (4,455,423)	鉄道資材 (3,841,342)	漂白綿布 (3,160,810)	捺染綿布 (3,085,620)	68,391,043
	ドイツ	鉄塊・鉄板 (1,286,599)	鋼鉄製枕木 (1,204,000)	亜鉛メッキ鉄線 (1,181,575)	アルファルファ種子 (832,339)	染付綿布 (736,876)	29,083,027
	アメリカ合衆国	木材（松） (7,943,490)	鋼鉄レール (2,415,762)	灯油 (1,436,768)	刈り取り機用結束糸 (1,364,027)	犂 (865,232)	28,920,443
	フランス	純羊毛布 (1,056,184)	ワゴン (599,068)	瓶詰め飲料 (597,120)	香水 (557,592)	瓶入りワイン (549,436)	21,248,202
	イタリア	染付け綿布 (3,411,175)	瓶入りワイン (2,250,063)	オリーブ油 (1,434,800)	米 (1,378,371)	アルファルファ種子 (1,211,992)	20,284,673
	ベルギー	鉄塊・鉄板 (1,358,175)	セメント (600,374)	鋼鉄レール (596,616)	板ガラス (459,989)	鋼鉄製枕木 (360,522)	8,727,076
	スペイン	瓶入りワイン (1,656,915)	サーディン (458,911)	オリーブ油 (400,020)	塩 (224,074)	鉛塊・鉛板 (213,783)	5,726,872
近隣諸国	ブラジル	マテ茶 (3,301,040)	コーヒー豆 (958,817)	タバコの葉 (637,965)	キャッサバ (108,111)	カカオ (107,926)	5,328,004
	パラグアイ	マテ茶 (672,211)	木材 (485,905)	ヒマラヤ杉 (248,663)	タバコの葉 (51,196)	ヒマラヤ杉の丸太 (38,062)	1,616,917
	ウルグアイ	砂 (264,403)	羊 (212,150)	牛 (167,260)	建設用石材 (131,131)	懐中金時計 (49,730)	1,023,612
	チリ	木製枕木 (314,903)	ナッツ (97,349)	木材 (91,214)	インゲン豆 (46,757)	ヒヨコ豆 (40,956)	669,679
	ボリビア	コカの葉 (75,484)	毛皮 (43,727)	—	—	—	126,237

出所：*Anuario de la Dirección General de Estadística*, 1906, pp. 336-352 より作成。

ブラジルへ輸出された小麦と小麦粉は，ブラジル国内で消費されたと考えることができる。

2 ブラジル向け小麦・小麦輸出の拡大

小麦と小麦粉のブラジルへの輸出について，少し詳しくみてみよう。アルゼンチンは，1890年ごろからブラジルへの輸出を急速に増加させはじめ，以後は一貫してブラジルに対して貿易黒字を計上した[23]。この輸出の急速な増加は小麦と小麦粉輸出の増加によるものであったが，その背景にはブラジルにおけるコーヒー生産の拡大があった。ブラジルの主要輸出品は，20世紀にはいって天然ゴム輸出が比重を高めるとはいえ，やはり圧倒的にコーヒーであった[24]。ブラジルのコーヒー輸出は，1880年の輸出額を100とすると，1890年150.8，1900年384.1，1910年305.6と推移した[25]。そして，1890年代の急速なコーヒー輸出の拡大にともなって，アルゼンチンからの食糧輸入もまた急増したのである[26]。

ブラジルのコーヒー輸出の拡大は，その市場のほとんどをアメリカ合衆国に見出していた。イギリスのコーヒー需要は非常に小さく，イギリスでは再輸出のための輸入がほとんどであった[27]。また輸入額自体も減少し続けており，1880年の輸入額を100とすると，1890年58.4，1900年37.1，1910年33.6と急減していく[28]。一方，合衆国のコーヒー輸入は，1900年に5200万ドル，1910年に6900万ドルと増大を続けた。そして，その大半がブラジルからの輸入であっ

23) Ministerio de Hacienda de la República Argentina, *op. cit.*, pp. 8-9 を参照。

24) ブラジルの輸出額に占めるコーヒーの割合は，1870年50.6%，1890年58.3%，1910年41.0%であった。ミッチェル編『南北アメリカ歴史統計1750-1993』443，445，524，528ページから算出。

25) 同上書，524，528ページから算出。

26) ブラジルの，不安定な国際市場価格に左右される熱帯産品生産に携わる一方で，日常的な食料品の大部分を外国から輸入する「矛盾した異常な状態」については，C. ブラド Jr.『ブラジル経済史』新世界社，1972年，第21章を参照。ただしブラドは，ブラジルがどこから食糧を輸入していたのかを明らかにしていない。

27) 1905年には，イギリスのコーヒー再輸出額は輸入額の90.2%に達した。*Annual Statement of the Trade of the United Kingdom with Foreign Countries and British Possessions*, 1908 から算出。

28) *Statistical Abstract for the United Kingdom*, 各年版から算出。

た[29]。この結果，ブラジルは合衆国に対して大幅な貿易黒字を計上するようになった[30]。

3　その他の輸出品目

トウモロコシは，ドイツ，上位5品目のみを取り出したために表示されていないイギリス（3百278万175金ペソ），フランス，ベルギーへの輸出比率が高い。トウモロコシの場合，小麦ほど各国への輸出額にばらつきがないのが特徴的である。そして冷凍牛肉や冷凍羊肉といった食肉については，そのほとんどがイギリスへ輸出されていた。なお，亜麻仁は搾油されて亜麻仁油となり，食糧としてよりも塗料などの原料として消費されるが，イギリス，ドイツ，ベルギーなどへの輸出が大きく，それらに比べフランスへの輸出はやや少ない。イギリスの1905年の亜麻仁輸入量は192万クォーターであり，その67％にあたる97万クォーターはアルゼンチンから輸入された[31]。

この他，各種の皮革やなめし皮の生産に必要なタンニンを含有するケブラチョ・エキスなどは，アメリカ合衆国への輸出が大きかった。南米の近隣諸国に対して，ブラジルへの食糧輸出以外には，生きた牛の輸出がウルグアイ向けに行われていた。これはおそらく，牛の肥育が国境を越えて行われていたためと考えられる。

---

29)　*Foreign Commerce and Navigation of the United States*, 各年版を参照。アメリカ合衆国のコーヒー輸入全体に占めるブラジルからの輸入の割合は，1900年で64.6％，1910年では76.5％であった。ブラジルに次ぐ輸入相手はコロンビアとベネズエラであったが，それらの占める割合は，それぞれ5～6％程度にすぎない。

30)　ブラジルは，アメリカ合衆国の他にはドイツに対して貿易黒字を計上していた。ただし，これも第1次大戦直前には赤字へ転換し，主要国に対してはアメリカ合衆国にのみ貿易黒字を有するようになる。ミッチェル編『南北アメリカ歴史統計1750-1993』486ページから算出。

31)　*Annual Statement of the Trade of the United Kingdom with Foreign Countries and British Possessions*, 1908 から算出。

IV アルゼンチンの輸入品目

1 輸入品目の概観

他方，輸入品についてはどうであろうか。前出の第3表によれば，1880年代には繊維製品，食料品と飲料の割合が高く輸入総額の52.3%を占めた。しかし以後はこれらの比重は低下し，繊維製品についても第1次大戦直前には最大の輸入品目ではなくなった。かわって上昇をみせたのは建設資材と燃料であり，建設資材は最大の輸入品目となった。これは19世紀末から都市開発が進行したためであり，建設資材の輸入増加はこの影響を受けたものとされる。

さらに1905年の主要輸入国からの輸入品について，前出の第4表をもとにみてみよう。大別すると，アルゼンチンは，① イギリス，ベルギー，ドイツから綿製品，鉄鋼，鉄道資材，石炭を，② フランス，イタリア，スペインからは毛織物，染付け綿布，食品，飲料を，③ アメリカ合衆国からは木材，灯油，農業資材，④ ブラジルからはマテ茶を輸入していた。

2 ヨーロッパからの輸入品

①でまず目につくのは，イギリスからの大量の石炭輸入である。1905年のイギリスの主要な石炭輸出先は，フランス，イタリア，ドイツ，ロシア，スウェーデン，アルゼンチンであり，これら6カ国への輸出は全体の約6割を占めていた。このうちアルゼンチンへの輸出が占めた割合は4.8%であり，イタリア（13.7%），ドイツ（13.7%），フランス（13.3%）に劣るとはいえ，スウェーデン（6.3%），ロシア（5.4%）とならぶ位置にあった。また1913年のイギリスの石炭輸出額は，1905年のそれの2倍に増加していたが，アルゼンチンへは6.1%が輸出されており，アルゼンチンの石炭輸入額は増加を続けていた[32]。アルゼンチンの石炭輸入の増加は，主に鉄道網の拡大によるものと電灯

32) *Annual Statement of the Trade of the United Kingdom with Foreign Countries and British Possessions* 各年版から算出。

と市街電車の敷設による発電需要の増加とによるものであった[33]。この他には，ドイツやベルギーからの鉄製品の輸入が確認できる。先にみた通り，建設資材は20世紀にはいって輸入に占める割合が高まったのであるが，その主要な輸入先のひとつはドイツであった。ドイツからの建設用鉄骨の輸入増加は，1900年代以降にアルゼンチンがドイツに対して輸入超過となる一因であったと考えられる[34]。

②の特徴は，食品や飲料の輸入が多く，また染付け綿布をイタリアから大量に輸入していたことである。アルゼンチンは，アメリカ大陸においてアメリカ合衆国に次ぐ移民受入国であり[35]，旧宗主国のスペインからのみならず，それを上回る多数の移民をイタリアから受け入れた。完成度が高く消費者の好みに左右されやすい染付け綿布のほか，オリーブ油の輸入が大きいことなどから，こうした輸入は移民出身国の生活様式がアルゼンチンに伝播したことによる影響とみることができる。さらに，イタリア移民の労働力がアルゼンチンの食糧輸出の拡大を可能にし，同時に増大する彼らの需要がイタリアやスペインからの綿製品や食糧などの輸入拡大を促す関係にあったと考えられる[36]。この他には，イタリアとドイツからアルファルファの種子が輸入されていたことも確認できる。アルゼンチンの食肉輸出の増加は，冷凍・冷蔵技術の開発や「交通革命」による輸送コストの低下だけでなく，牧草地の改良や肉畜の品種改良をも重要な技術的要因としていた。そしてこれを可能にしたのは，ヨーロッパからの牧草種子や種牛などの輸入だったのである。

---

33)　*Parliamentary Papers*（以下 *P. P.*）1912-3, Vol. XCIV, p. 149 を参照。従来，鉄道建設との関係からのみとらえられてきた石炭輸入であるが，ここでは電力需要の増大にともなう火力発電サイドからの石炭需要の増加があったことを確認しておきたい。

34)　*Reports from the Consuls of the United States*, 1905, p. 60 を参照。

35)　アメリカ大陸への移民流入数については，ミッチェル編『南北アメリカ歴史統1750-1993』93-98ページを参照。

36)　1913年にイタリアはイギリスに次ぐ綿製品の輸入相手国であり，輸入額は1911年の700万金ペソから1913年の940万金ペソへと着実に増加していた。Ministerio de Hacienda de la República Argentina, *op. cit.*, p. 98 を参照。

3 アメリカ大陸とオーストラリアからの輸入品

③の特徴としては，まず，アルゼンチンは森林資源が乏しいため，アメリカ合衆国から大量の木材輸入を行っていたことである。そして，この木材輸入も建設資材需要の増加と関連して大幅な伸びをみた。1895年の合衆国からの木材輸入量は23万立方メートルであったが，1905年には49万立方メートルと約2倍に増加している[37]。

しかし，さらに注目すべきは農業資材の輸入である。合衆国の農業資材の輸出額は，1900年から1913年の間に2.6倍に増加したが，これはヨーロッパ・ロシア，カナダ，アルゼンチンへの輸出が著しく伸びたためであった。同期間にアルゼンチンへの農業資材輸出は約3倍になり，1913年にはヨーロッパ・ロシア（998万ドル），カナダ（895万ドル）に次いで835万ドルの輸出があった[38]。とはいえ，アルゼンチンの農業資材輸入は，合衆国からのみ行われていたのではない。1913年の農業資材の輸入相手についてみると，合衆国（65％），オーストラリア（10％），イギリス（9％）という内訳であった[39]。

オーストラリアの農業資材輸出については，わが国ではほとんど知られていないため，やや詳しくみてみることにしたい。オーストラリアから輸入されてアルゼンチン国内で大きなシェアを持ったのは収穫機であり，特に刈り取り・脱穀・袋詰の3作業が1台で可能なストリッパー・ハーベスターと呼ばれる機種であった[40]。ストリッパー・ハーベスターの製造で最も成功を収めたのはマッケイ社であり，同社の歴史は1884年に H. V. マッケイがサンシャイン・ストリッパー・ハーベスターを開発したことに始まる。20世紀初頭にメルボルン郊外に設けられたサンシャイン・ハーベスター工場は，20世紀前半のピーク時には3000人の労働者を雇用し，30ヘクタールの敷地面積を持つオーストラリア

37) *Anuario de la Direccion General de Estadistica*, 各年版から算出。

38) アメリカ合衆国の農業資材輸出額は，レーキ，播種機，刈取機，プラウ，脱穀機，その他の農機具，結束ひもの輸出額の合計。*Foreign Commerce and Navigation of the United States* 各年版から算出。

39) Ministerio de Hacienda de la República Argentina, *op. cit.*, pp. 87-113 から算出。

40) *P. P.*, 1912-3, Vol. XCIV, p. 150 を参照。

最大の農業機械製造工場へと成長を遂げた。

マッケイ社の初めての海外輸出は1902年のことであった。1902年にオーストラリアで大旱魃が発生し収穫機への需要は激減したため，マッケイは海外に販路を見出すことを余儀なくされた。そこで彼は，兄弟のサムを50台の機械とともにアルゼンチンへ派遣した。これがマッケイ社の輸出の始まりであり，非常に成功を収めた。この後，マッケイ社は南アフリカやシベリア，合衆国向けに輸出するようになった[41]。

さて④については，先述のように，アルゼンチンはブラジルへの小麦や小麦粉の輸出を増大させていたが，他方でブラジルからはマテ茶の輸入が増大していた。1900年のブラジルからのマテ茶の輸入額は256万金ペソであったが，1905年には330万金ペソに増加した。マテ茶はアルゼンチンでは重要なビタミン源として常飲されるが，ヨーロッパやブラジル向けの食糧輸出の拡大にともなって，マテ茶に代表される近隣諸国の熱帯産品への需要が増大していたことを確認しておきたい[42]。

V　穀物商社の活動

最後に，食糧輸出を直接担ったのはいかなる主体であり，どのようにして輸出が行われたのかを確認しておこう。流通部面を分析対象とする本稿では，輸出商社をとりあげて検討することにしたい。とりわけ，貿易の拡大と貿易品目の多様化を主導したのは穀物輸出であったから，穀物商社に注目することにしよう。

アルゼンチンの穀物輸出は，1913年までに主要4社の手にほぼ掌握される状態になっていた。これらの4社とは，ドイツ系のブンゲ＆ボルン社，フランス

41)　サンシャイン・ストリッパー・ハーベスターについては，ヴィクトリア州立博物館ホームページ（http://www.museum.vic.gov.au）を参照。最終閲覧日2006年3月2日。現在の同社は，アメリカ合衆国ジョージア州に本社を置く多国籍企業 AGCO の子会社として，アジア・太平洋地域を管轄している。

42)　1900年の輸入額については，*Anuario de la Dirección General de Estadística*, 1901 を参照。

系のルイ・ドレフュス社，ドイツ系のヴァイル兄弟社，そしてルイ・ドレフュス社から派生したユニ＆ヴォルムス社であり，いずれもヨーロッパ系企業であった[43]。さしあたり，ブンゲ＆ボルン社の事業についてみることにしよう[44]。

ベルギーのアントワープに拠点をおくドイツ系商社であったブンゲ社は，19世紀後半にそれまでの取扱商品であった熱帯産品に加えて，穀物取引への関与を深めていった。ブンゲ家の事業拡大は，1876年にエルネスト・ブンゲがアルゼンチンへ渡ったことに始まる。この時，アントワープの本店は，弟のエドゥワルドに委ねられることになった。1884年にエルネストは，ともにアルゼンチンへ渡った義兄弟でドイツ系のヨルゲ・ボルンと共同で，穀物輸出商社ブンゲ＆ボルン社を設立した。20世紀初頭には，ブンゲ＆ボルン社は，アントワープのブンゲ社のネットワークも利用することで，ヨーロッパとアメリカの16都市に張りめぐらされた代理人網を活用できた。そして，これらの海外の代理人網を通じて，同社は常に世界市場の価格動向についての情報を入手していた。

一方，アルゼンチン国内においては，ブンゲ＆ボルン社は，バイア・ブランカとロサリオ，サンタ・フェの3つの港湾都市に買付代理人を持っていた。とくにバイア・ブランカとロサリオは，ブエノス・アイレスとならぶ輸出港であり，小麦についてはブエノス・アイレス，バイア・ブランカ，ロサリオの3港で全輸出量の85％が扱われた[45]。これらの3都市の買付代理人は，アルゼンチン国内の合計40ヶ所に現地代理人を持っていた。

---

43) Sir R. Tower to Sir Edward Grey. Buenos Ayres, January 3, 1913, Annual Report on Argentine Republic for the year 1912, in Bourne, Kenneth and D. Cameron Watt (general editors), *British Documents on Foreign Affairs: reports and papers from the foreign office confidential print*, part I, series D, Vol. 9, UPA, 1992, p. 317.

44) 以下，ブンゲ＆ボルン社についての記述は，Green, Raúl H. y Catherine Laurent, *El Poder de Bunge & Born*, Editorial Legasa, 1985, primera parte に依拠した。また，ダン・モーガン『巨大穀物商社』日本放送出版協会，1980年も参照。

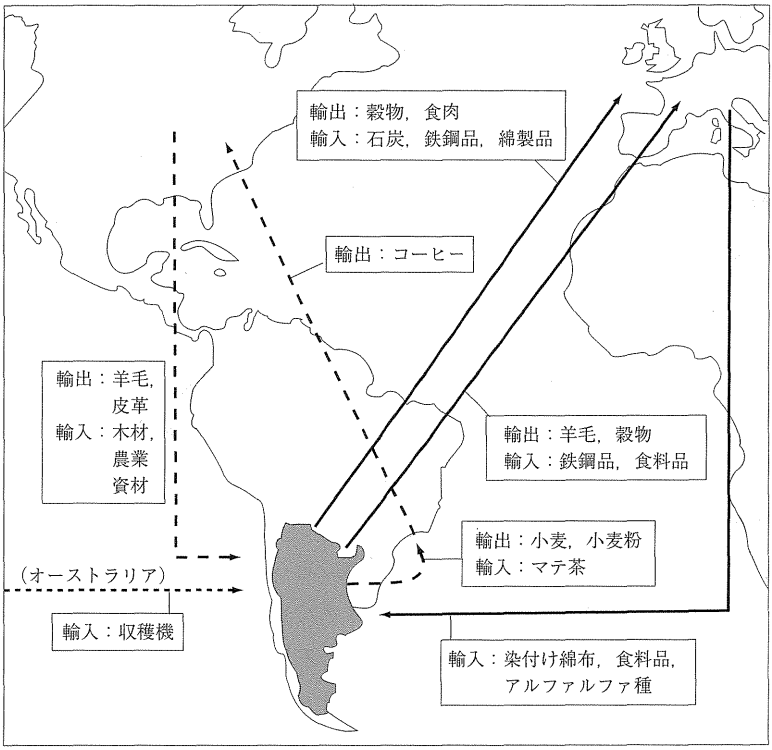
45) Ministerio de Agricultura de la República Argentina, *Estadística Agrícola*, 1912, p. 51 から算出。小麦，トウモロコシ，亜麻仁の主要3品目のすべてにおいて取扱量が大きかったのは，ブエノス・アイレスとロサリオであった。バイア・ブランカのトウモロコシと亜麻仁の取扱量は微小であった。サンタ・フェの取扱量は総じて小さく，買付代理人がおかれた理由は現在のところ不明である。

ブンゲ＆ボルン社の日々の業務は，共同経営者のヨルゲ・ボルンによれば，次のようにして行われていた。まず，ブエノス・アイレス事務所の営業開始にあわせて海外の代理人からケーブル通信が入り，世界市場の価格が伝えられる。その後，これらの情報は，即座にバイア・ブランカ，ロサリオ，サンタ・フェの3都市にいる買付代理人に電信で伝えられた。そして今度は，買付代理人から彼らの40の現地代理人に情報が伝達された。情報を受けた現地代理人は，鉄道駅で穀物集荷人と接触して様々な穀物を買い付けた。そしてその日の最後に，ブエノス・アイレス事務所から一日の営業成果が海外の代理人に向けて発信された。

またブンゲ＆ボルン社は，アルゼンチン国内と海外に流通ネットワークを築くのと並行して，1905年には隣国のブラジルへの進出を開始した。先述のとおり，19世紀末からブラジルはコーヒー輸出を急増させたが，これはとくにサントス港を輸出港とするサン・パウロ西部でコーヒー生産が本格化したためであった。それまで中心的なコーヒー生産地であったのは，リオ・デ・ジャネイロやサン・パウロ東部，ミナス・ジェライスであったが，これらの地域では，コーヒー樹の高齢化や地力の枯渇，可耕地の不足などによって生産は衰退傾向にあった。かわって，サン・パウロ西部では，手つかずの土地へのイタリア移民の導入がサン・パウロ州政府の政策支援を受けて行われ，同地は一躍コーヒー生産の中心地となった[46]。ブンゲ＆ボルン社は，大規模なコーヒー農園の開発によって生じた食糧需要の増大をとらえ，ブラジル向けに小麦輸出を行うにとどまらず，現地での小麦粉生産に着手したのである。同社は子会社としてサントス製粉社を設立し，サン・パウロ市場の大部分へ小麦粉の供給を開始したのであった。

46)　サン・パウロ西部のコーヒー農園開発については，鈴木茂「19世紀後半ブラジル『サン・パウロ西部』におけるコーヒー生産の伸張と労働問題」『歴史学研究』562巻，1986年12月，およびブラド Jr.，前掲書，299-301ページを参照。

第1図　第1次大戦前のアルゼンチン貿易関係図



お　わ　り　に

本稿では，世紀転換期ごろからのアルゼンチンの貿易構造の変化が食糧輸出の増加によるものであったことを確認した。そして，この食糧輸出の増加につれて，ヨーロッパ「世界経済」におけるアルゼンチンの貿易関係は複雑化し，もっぱらヨーロッパとの関係であったものから，ブラジルやアメリカ合衆国，さらにはオーストラリアをも含めた多角的関係へと展開したことを明らかにした。こうした分析結果をもとにヨーロッパ「世界経済」におけるアルゼンチンの位置についてまとめると，第1図のように描くことができる。

同図から改めて確認しておきたいのは，アルゼンチンは西ヨーロッパのイギリスやドイツに対しては食糧と原材料を輸出し工業製品や燃料を輸入していたが，南ヨーロッパのイタリアやスペインからはほぼ一方的に消費財輸入を行っていたことである。この2つの貿易のあり方は，アルゼンチンの食糧および原材料輸出が増大するにつれて，その生産を担ったイタリアやスペインからの移民の生活必需品需要も増大するという最終需要連関効果を考慮すれば説明可能であり，したがって両者は関連性のあるものと考えられることをいま一度確認しておきたい[47]。この最終需要連関効果の存在については，コーヒー輸出を拡大させたブラジルがアルゼンチンから食糧輸入を増大させたことや，アルゼンチンのブラジルからのマテ茶輸入が増加したことにもいえると思われる。ただし，この点についてはさらなる実証的検討が必要であり，今後の分析課題としたい。

47)　最終需要連関効果については，杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房，1996年を参照。